

青春とは、いったい何なのだ。躍動する若さか。老醜にも似た鬱屈か。動か静か。光か陰か……。やり場のない憤怒。満たされることのない孤独。おさまらない痛痒。自尊と自棄。躁鬱と分裂。十九歳の地図に塗りこめられた、この、青春を何と見るか。感動か。幻滅か。マルか。バツか。

十九歳の地図

きみの青春の尺度が今、スクリーンで計られる。一九七九年度キネマ旬報第七位。日本映画ペンクラブ第六位。優秀映画鑑賞会第五位。ムービーマガジン第二位。映画芸術第一位。優秀映画鑑賞会推薦。日本映画ペンクラブ推薦。日本映画は、他に比類なき青春映画を、もってしまった。

原作＝中上健次(河出書房新社刊) 脚本・監督＝柳町光男 株プロダクション群狼作品 上映時間＝1時間49分

カンヌ映画祭出品記念ロードショー 7月5日(土)より

上映(連日)11:00/1:10/3:20/5:30/7:40

特別鑑賞券発売中 ¥1,000

(当日一般 ¥1,300 学生 1,100 の処) (都内プレイガイド発売中)

八重洲スター座

国電東京駅八重洲中央口・富士銀行並び ☎(03)201-5081



●解説

この映画は芥川賞作家中上健次が昭和48年雑誌『文芸』に発表した短編小説「十九歳の地図」の映画化である。これまでに幾多の監督がこの映画化を試みたが、この作品の持つ毒性ゆえに、実現までにはいかず、いわば「幻の企画」となっていたものである。

いつの時代にも社会の矛盾や不条理に最も敏感に反応するのは、その時代を生きる若者たちである。特に少年から大人への成長期の少年たちの心は、現実社会の混沌と荒唐の真只中で、大人として人間として、自らを自覚していかなければならない不安定な時期にある。

この映画は、社会の現実や人間が生きることの生々しさの中で、拒絶と共感をくり返ししながら、どのように大人になっていくか、どのように人生というものが、人間というものの孤独や哀しみを知っていくか、その過程をつぶさに描くものである。昨今の氾濫する少年たちの理由なき自殺、殺人事件などに潜む、人間の暴力性をえぐりだし、混沌とする社会に、混迷する人間たちに問題提起する注目すべき異色作である。

監督は「昨年暴走族の少年たちの青春を活々と写し撮った長編ドキュメンタリー『ゴットスピード・ユー・ブラック・エンペラー』（東映配給）の注目の新人、柳町光男。

主人公の吉岡まさる役には、本間優二。彼は昭和33年2月東京生れの21才の青年である。彼は一年前まで暴走族「ブラック・エンペラー」の会長を勤めていた男であり、現代が生み落した鬼ツツ子の体現である。しかし、こんなアナキーな半面、彼は非常にナイーブで繊細な感受性の持ち主であり、若者特有のけだるい憂鬱感を軀全体から漂わせている。

既成の役者には出来ない生で自由な新しいタイプの若者像を表現するのにびつたりの、注目すべき新人の登場である。

その吉岡と同室のダメ男に蟹江敬三、その恋人マリアには、役者への再起を決した沖山秀子が久々に本格的な演技を見せる。他に特別出演として楠侑子、原知佐子、山谷初男、白川和子、柳家小三治らが脇を固めている。

上映時間
1時間49分

図

地

の

歳

十

九

昭和54年カラー作品

林・プロダクション
群狼作品

脚本 柳町光男
監督

原作 中上健次

●物語

主人公・吉岡まさるは十九才である。地方から上京してきて新聞配達をしながら予備校に通っている。日々の労働は厳しい、三百軒以上の玄関に新聞を入れる単調で退屈な肉体労働。集金に行けばどの家からもうさん臭く見られ、嫌われる。その存在はほとんど無視されている。

吉岡は密かに予備校の物理のノートに配達区域の地図をつづっている。配達先の家々の名前を書き込み、Aの家は毎日犬が吠えてくる。×印ひとつ、Bの家は玄関先に生意気にも真赤な花が咲いた花鉢を置いてやがる。×印ふたつ。Cの家は新聞受けにクギが出ていてなかなか直そうとしない。×印みつつた、それぞれの不満度を×印の数で表わしたあとは、今度はそれぞれの家に片端からいやがらせのいたずら電話をかけていく。

吉岡の部屋には同僚の三十七才になる独身男紺野が同居している。ホラばかり吹いていて、実際には何も出来ない典型的なダメ男である。上昇志向を持つ吉岡には、人生に乗り遅れている紺野なんか、見たくもない反吐が出るような存在なのだが……どうにも気になる存在でもある。そんな紺野に神秘的な女があらわれる。自殺未遂の末、ビッコになった醜体の女。やたら男と寝ては、生活の糧にしている娼婦でもある女。紺野に輪をかけて、醜く、汚なく、そして孤独な女である。吉岡にとっては見たくもない大人の人間の汚なさの象徴に見えるのだが、紺野は「マリア」と呼んで慕う。

しかし、精神的な至福が深まれば深まる程、社会的には犯罪を重ねることになり、強盗傷害罪でつかまってしまふ。

紺野の決定的な脱走、マリアの俗っぽさをなじむ吉岡に、マリアは「死ねないのよお、死ねないのよお、何度も死んだけど、だけど死なせてくれないのよお……」と悲痛な言葉を投げかける。吉岡は泣きつづけるマリアの姿から紺野を脱走させた人間の聖性のようなものを感じるのである。

そして、吉岡の電話はすべての社会、すべての人間にむかつての脅迫電話となる。東京駅や街のガスタンクへの爆破予告の電話をかけた続ける。街を爆破してやる、ノ吹っ飛ばしてやる、ノ………

●論評

かわなかのぶひろ氏映画作を評

●派手なうわべだけのドラマじゃない。青春の真の姿を描いた、全く新しいタイプの青春映画だ。

斎藤正治氏映画評論家評

●冒頭の五分間の迫力と緊張は「復讐するは我にあり」の長いトランプシーンに匹敵する。主題からも映像からも大へんな作品が出たものだ。脱帽である。メジャーの監督達、この新人にさして、何とする!!

佐藤忠男氏映画評論家評

●若者たちの生活を実に生々しく描き出した力作です。私自身の二十歳前後をまざまざと思い出しました。

品田雄吉氏映画評論家評

●新人監督・柳町光男の演出感覚は鋭く新鮮だ。新人本間優二はなかなかの掘り出し物である。骨太でしっかりした作品であり、もう一度観たい映画である。

林 美雄氏「タウンサン」評

●七〇年代の最後を飾るにふさわしい素晴らしい青春映画です。時代の空気を的確に把握した迫力ある攻撃の姿勢に敬服しました。

松田 修氏「国文学者評

●孤絶は有罪か、青春とは処罰の季節か。中上の情念の軌跡は今、見事に受肉した。柳町の才能の一挙の開花は、過酷なまでに鮮烈である。